



とよっ子応援団のメンバー

とよっ子応援団

学生

地域貢献事業

第7回

で学習支援ボランティアと子ども食堂を手伝っている。

1〜3年のメンバ

ー22人は、子どもたちの宿題を見るだけでなく、時に無邪気に遊び、時に人生の頼れる先輩として相談に乗り、子どもたちに寄り添う。

「今は核家族化が進み、部活もないので居場所がだんだん減ってきている。子どもたちにとって、安心して来られる場所をつくりたいと思っています」と代表の3年、小久保竜馬さん。

「とよっ子応援団」は、豊橋市内の「やまぐちさんちのハピネス食堂」

う一つの居場所になれたらいいなと思っています」と話す。

新型コロナウイルス

感染症の影響で一時、活動の場を失ったメンバーたちだったが、前を向き続けた。イベント中止が相次ぐ中、友達と遊ぶことも制限されて

いる子どもたちのために、学習会やクリスマス会などを独自で企画した。その根

拠として、家と学校ではない、楽しく何も考えなくていい、も

底にあるのは「子どもたちに居場所を」という強い思いからだ。

現在、子ども食堂

は、赤ちゃん連れママや高齢者、社会から孤立している人など、多世代が気軽に足を運ぶ場所になっている。メンバーも「コロナで人との関わりが強制的に絶たれてしまった中、一人で家にいる

「子どもたちに居場所を」強い思い

「子どもたちに居場所を」強い思い



食後に子どもと学生が絵を描いて遊んでいる様子

子どもや孤立している子育て中の親御さん、世代問わず地域の居場所を必要としている人が多いのかなと思っっています。子ども食堂のように、心を落ち着ける場所が地域にあることが大事だと痛感しています」と話す。

居場所としての存在感が増す子ども食堂だが、さまざま課題も抱える。その一つが「貧困の子どもたちが利用する」というイメージの払

拭だ。また、子どもが一人で訪れることを考えると、歩いて行ける距離にあることが必須になるが、食堂の数は足りていない。「とよっ子応援団」は、独自で子ども食堂を開設することも目標の一つにしている。食を通じたコミュニケーションの大切さを伝えると共に、地元食材を使うことで食育にもつなげたいという。

※協力・愛知大学 (飯塚雪)